

あとがき

兵庫県立大学 名誉教授 野津 隆志

本年度の研究紀要第二十五輯では、3人の専門家による論文と1人の実践者による実践ノートに掲載しています。ここで簡単にそれぞれの記述を引用しながら内容を紹介します。

山縣文治氏には「子ども虐待予防支援の課題」を執筆いただきました。論文では「すべての人が虐待をする可能性がある」という視点から、虐待発生のメカニズムを考えることの重要性を指摘しています。また、虐待発生のメカニズムを「虐待の壺」というモデルを使って分かりやすく説明しています。さらに、虐待予防のための支援のあり方を4段階の循環論として提示しておられます。すなわち、第1次予防(発生予防)、第2次予防(早期発見/早期対応)、第3次予防(重度化・深刻化の予防/回復的支援)、第4次予防(フォローアップ/再発の予防・見守り)の4ステップです。この支援のどこかに専門家だけでなく、家族、一市民、当事者が何らかの形で関わる必要性も指摘されています。

大岡由佳氏には「犯罪被害者等の人権 一被害回復のサポートはどうあるべきか」というタイトルの下で、日本で従来、立ち遅れていた犯罪被害者らへの支援の現状と今後の課題について執筆いただきました。現在、犯罪被害者への支援は全国の民間被害者相談団体による電話相談、裁判関連支援(法廷付き添い、代理傍聴支援等)、弁護士法律相談付き添いなどが行われています。NPO法人全国被害者支援ネットワークによると、全国48箇所にある被害者支援センターが取り扱った相談総数は年間約4万件にも上ります。しかし、それらの民間被害者支援団体は、各都道府県に約1箇所ずつしか存在しないため、大きな限界があることが指摘されています。

伊藤公雄氏には「アンコンシャス・バイアスとは？」を執筆いただきました。アンコンシャス・バイアスとは、最近注目されている概念で「無意識の偏見」を示しています。われわれは日常生活で、たとえば「外科医」と聞くと、現実には女性の外科医も存在しているにもかかわらず、男性の外科医をイメージします。論文ではこうしたジェンダーをめぐる無意識の偏見が取り上げられています。ジェンダーをめぐるバイアスの背景には、個々人の持つ多様性が無視され、男女という二区分に振り分けてものごとを決めつけるわれわれの無意識の価値判断があります。また多くの場合、男性基準でものごとを評価するという問題も存在することが論文では指摘されています。

三澤雅俊氏には実践ノート「インターネットの現状と課題～尼崎市インターネット差別書込みモニタリング事業の取り組みから～」を執筆いただきました。インターネットやSNSを使った誹謗中傷や人権侵害が近年大きな問題になっています。ここでは、尼崎人権啓発協会の現場の立場から、2010年より同市が実施している「インターネット差別書込みモニタリング事業」の現在までの経緯を詳しく記述しています。「手順等のマニュアルづくり」「モニタリングメモ、削除結果一覧表の作成」「都道府県別集計表等の作成」などの工夫が紹介されています。同市は「モニタリング・ネットワークづくり」も実施し、全国の約80もの自治体、団体、個人とネットワークをつくり、情報提供や意見交換などがなされていることも紹介されています。